

FOA-NEWS

通算第 29 号

2009/9/15

「部長就任にあたって」

日本アメリカンフットボール審判協会
関東審判部 部長 大野 和明

このような時代に関東審判部部長に任命され、光栄であるとともに大変重い責任を感じております。本当に力不足の若輩ものでありますが、奮闘してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

簡単に自分の経歴を紹介させていただきます。

高校1年生からアメリカンフットボールという競技とめぐり合い、すでに33年が経過しました。

選手時代、最初はただかっこよさにあこがれて始めましたが、続けていくうちに闘争心、執着心、冷静さ、そして緻密さが求められるこのスポーツの奥の深さを実感するようになり、心からこのアメリカンフットボールが好きになりました。ファイナルスポーツと言われる由縁かもしれませんが、タイムスポーツでありながら、攻撃しているチームが時計をコントロールできるというのは、見ている人たちにも大変分かりやすく、とくに競った試合の残り2分を切った攻防は最高にドキドキワクワクできるスポーツにさせていると思います。

社会人になってすぐに関東審判部に入り、諸先輩たちの厳しくも優しいご指導をいただきながら、途中5年ほど北海道に転勤したときを除いて、約21年間も間、何とか続けることができました。

自分にとって、このスポーツと出会えたことがその後の人生に大きなプラスになりました。

とくに選手時代、審判時代を通じて先輩をはじめとして多くの仲間との出会いはかけがいのないものであると同時に自分自身の貴重な財産となっており、自分がこのスポーツに携われる環境をつくっていただいたすべての方々に心より感謝申し上げます。

今後ものはなはだ微力ながら、すこしでも恩返しができるよう頑張っていく所存であります。

さて、新部長として日本におけるアメリカンフットボールという競技の発展に貢献するため、関東審判部の皆さんが良い審判になることを常に目指すことを実行します。前部長の東さんが毎年話されていたアメリカのことわざ「良いチームを作るには良い選手と良いコーチと良い審判が必要である」ということを私たちのすべての行動の原点としていきたいと思ひます。

このような厳しい経済環境の中で、皆さんの生活基盤である仕事は極めて多忙な状況と思ひられます。

本当に限られた時間を審判活動に提供していただいていることに感謝を申し上げます。

人生においては様々な選択肢がそれぞれの方にそれぞれの形で訪れます。

前向きにとらえて取り組むか、仕方なくやるのか、その人の選択です。

どちらにしても時間は確実に過ぎていきます。

審判をすることになったきっかけもそれぞれ異なっていると思いますが、せつかく審判に携わることになったのですから是非とも前向きに取り組んでいただきたくようお願いいたします。

長く続けていくにはいろいろと支障があることもあるかもしれませんが、それを乗り越えていくことによって、この審判活動はライフワークとなっていきます。真剣に取り組めば取り組むほど、自分自身が鍛えられ成長するとともに高い審判技術が身につく、その結果、選手やチームに確実に貢献できるのです。とても素敵なことだと思ひませんか。

関東審判部200数十名のひとりひとりが常にステップアップを目指して前向きに課題に挑戦している、そんな技術集団チームができたらいいなと心から願っています。

「理事会は部員に奉仕するためにある」という認識と決意のもと、部長として様々な課題にチャレンジしていきたいと思ひます。皆さんのフットボールに対する熱い気持ちを礎にして、ますます技術を磨いていく集団になるよう、誠実に与えられた役割を果たしていく所存です。

お礼が遅くなりましたが、先般の日本におけるアメリカンフットボールが始まって75周年記念行事の「ノートルダム・ジャパンボウル」の開催に際して、関東審判部の多くの方にチケット購入および協賛金をいただいたことに心より感謝申し上げます。大変嬉しかったです。

最後に、今後とも、部員の皆様と楽しくオフィシエティングができるよう、対話を重視して、伝統ある関東審判部の運営を行っていくことを宣言し、部長就任の挨拶といたします。





ジュニア世界選手権大会 2009 (JWC: Junior World Championships) 体験談

阿部 仁

1 14ヵ国33名の審判が集結

国際アメリカンフットボール連盟が主催するジュニア（19歳以下）選手による世界大会の記念すべき第1回大会には日本、カナダ、アメリカ、メキシコ、ドイツ、スウェーデン、フランス、ニュージーランドの8ヵ国が出場し、米国プロ・フットボールの殿堂があるオハイオ州キャントンにおいて熱戦が繰り広げられた。国際的なのはチームだけではない。審判も世界14ヵ国から32名が召集された。出身地域が違えばルール適用も微妙に違い最初は戸惑ったが、1回戦、2回戦をこなす中でお互いが打ち解けてきた。

2 決勝戦のジャッジ

JWC 決勝戦の日曜日はアメリカの独立記念日の翌日だった。久々の好天ということもあり、キックオフの午後1時頃には、地元アメリカが優勝することを信じて疑わない15,000人以上の観衆でスタジアムは埋まった。アメリカに不利なジャッジに対して容赦ないブーイングが飛ぶ。

自分のジャッジが普段に比べて硬くなっているように感じる。思ったようにすっと動けないのだ。ビッグゲームほど“Take your time（余裕をもて、間をとれよ）”と試合前トニーにアドバイスを受けたことが何度も頭をよぎるのだが、動きが緩慢とを感じる分、それを取り戻そうとつい焦って、力んでしまう。とにかく気持ちだけは切らさずに、もどかしさと戦いながらグラウンドを走りつづけた。試合終了のホイッスルが鳴ったとき、大きなミスもなく無事終わってほっとした自分がいた。普段なら、



うまくいったよかったなあという心地よい疲労感に包まれるのだが、こんな守りに入るのは初めての経験だった。

3 「アウェー」で実力を発揮する難しさ

国際試合であっても平常心でジャッジを、と心がけたがなかなかうまくいかなかった。考えられる要因はいくつかある。初めてチームを組む審判仲間ゆえ、信頼関係が十分に出来上がっていなかったのだろうか？ファンの熱狂的な声援やブーイングには慣れていたつもりだが、それに影響された部分も少なからずあったのではないかな？テレビで生中継されている中、見られているからミスができないという意識が少なからずなかったか？どれをとっても初めてづくしの経験だった。アウェーでの平常心とは、不慣れな環境で場数を踏んでこそたどり着ける境地なのだろう。

試合後、アメリカ人らしき親子が僕のそばに寄ってきて、「あの、フラッグをいただけませんか？」と尋ねられた。日本の旗を持ち歩いているとでも思われているのだろうか？「フラッグって何のこと？」と聴き返すと、少年は僕の腰につけている審判のイエローフラッグを指差した。何十年か後の国際大会でこの少年がすばらしい審判として育ってくれているといいなと思いながら、フラッグを手渡しグラウンドを後にした。



JWCに参加して

東 俊

6月25日(木) 16:25に馬島さんと伴に成田を出発し、ミネアポリスを経由して、同じ25日の18:08定刻通りにクリーブランドに到着しました。空港には、ボランティアのKenとGuyが待っていてくれました。すでに、英国のJimとDavid、それとメキシコのSergioが到着していました。オーストリアのThomasの到着を待って、OHIO州CANTONのWalsh大学に向け出発しました。奇しくも、この5人は初戦の私のクルーになるメンバーです。あと、関西からの高倉さんが入ってクルーが完成です。

待っている間に停電があり、空港は真っ暗闇になりましたが、何事もなかったように出発しました。その後、高倉さんは、深夜に、この真っ暗闇の中クリーブランド空港に着陸し、大学に來たのですが、そのときもKenとGuyが運転を担当してくれたそうです。この後、この二人だけでなく、様々な場面でオフィシャル・サポート・スタッフの皆さんには、大変にお世話になることになります。

Walsh大学に到着すると、すでにオープニング・パーティが始まっていました。体育館にシートを敷いて、すべての関係者が一堂に介しての、アルコール抜きのディナー・パーティです。500人を越える人間が集まっていたかと思います。それぞれのテーブルは、同じ国の人間が集まってしまわないように、参加8ヶ国(4大陸)から一人ずつ座るように工夫されています。IFAFのメンバーも、監督・ヘッドコーチも、選手も、審判も、です。素晴らしい工夫だと思いました。

審判は、14カ国から32名が集まりました。2007年の川崎でのワールドカップでは、参加6カ国から3名ずつの審判が集まりましたが、今回は、IFAFの審判委員会が世界中から人選しての派遣となりました。オーストラリア(1)、オーストラリア(1)、カナダ(2)、デンマーク(2)、フィンランド(1)、フランス(2)、ドイツ(3)、英国(2)、日本(4)、メキシコ(1)、オランダ(1)、ノルウェー(1)、スウェーデン(2)、アメリカ(9)です。

実際の審判活動は、翌日の6月26日(金)の審判全体会議から始まりました。

6月26日(金)

9:30~17:15 Official Meeting

6月27日(土) Game Day #1

19:00~ Opening Ceremony

20:00~ U.S.A. vs. France (R)

6月28日(日)

10:30~ Cleveland 見学

19:30~ Guyの接待で夕食

6月29日(月)

9:30~12:00 初日の試合のレビュー

13:00~ Pittsburg 見学

6月30日(火)

10:00~ レフリー・ミーティング

11:00~13:00 プリゲーム・ミーティング

14:30~ NFLホール・オブ・フェイム見学

18:00~ Guyの接待で夕食

7月 1日(水) Game Day #2

13:00~ Sweden vs. France (LJ)

7月 2日(木) 10:30~ Atwood Lakes Resort

7月 3日(金)

12:30~15:30 二日目の試合のレビュー

/プリゲーム・ミーティング

16:00 John Parry 宅でのBQパーティ

7月 4日(土)

16:00~ Germany vs. Sweden (LJ)

7月 5日(日)

13:00~ 決勝戦: Canada vs. U.S.A.

16:00~ Closing Ceremony

19:00~ Celebration Party

7月 6日(月) 適宜出発

充実した試合の準備、試合後の映像を用いたレビュー(担当されたBillとTomの、寝る間を惜しんでの作業に頭が下がります)、それぞれのレフリーに任されたプリゲーム・ミーティング、そして工夫されたオフ日のイベントの数々。素晴らしい準備と運営です。

初戦のクルーは、R:東俊、U:Davit Parsons(UK)、HL:高倉明仁、LJ:Jim Briggs(UK)、BJ:Thomas Hofbauer(Austria:プログラムの国旗はオーストラリアになっていました)、SJ:Sergio Avila Sabchez(Mexico)、FJ:馬島敦の7人です。

スタンバイはAlterといわれていますが、3人つきました。専任順が決まっています、一番はレフリーのバックアップです。2番がアンパイヤ、ラインズマン、ラインジャッジのカバーを担当します。3番目が、ディープのカバーを担当します。Alterは、下は審判用のニッカー・ポッカーですが、上が白のポロシャツですので、バッグの中に、ゼブラと帽子、その他の審判道具を入れて、フィールドに持参していました。

1. Zoltan Yoboczky(Germany)、2. Henning Rieske(Germany)、3. Jeffery Batzler(Sweden)の3人でした。試合は、78-0でアメリカの勝利、2時間30分の試合でした。

得点差が開いた試合をどのようにコントロールするかという試合でしたが、フランス・チームは、劣勢でも下を向かず、ひたむきにプレーをしてくれ、クリーンに

試合を進めてくれました。

アメリカがフランスのパスをインターセプトし、リターンしているときに、背後のブロックとホールディングが発生しましたが、施行するべき反則を間違えてしまいました。

LJのJimは、アメリカのヘッド・コーチからそのことを聞かれたときに、日本では、背後のブロックはホールディングと言うんだといって、笑いを取ってくれたそうです。

全部で20を超える反則がコールされました。取り消しもありました。試合を見ていた人からは、日本人のフラッグが多かったといわれました。

アメリカのヘッド・コーチから、オフENSEのホールディングをコールしたときに、どのようなことでコールされたのか?という質問を受けました。

掴んで、相手の動きに制約を与えたと伝えたら、納得してくれました。

ホールディングは、どのようなアクションであったかを説明できる事が必要になる時代かなと感じました。この現象は、ライブボールでのパーソナル・ファウルの説明を行う流れと一致していると感じました。

落ち着いてレフリーができればと思っていましたが、なかなかそうは行きませんでした。

それらが、インタビューでの60点の発言になったと思います。

でも、皆さんのお陰で、家族の協力でJWCのフィールドに立たせてもらって、フィールドでのクルーとサポートスタッフの協力で、何事もなく試合を進められたという思いが強いです。前日の1時間半のプリゲーム・ミーティングの効用だと感じた次第です。

コーチ、プレーヤーにも感謝です。反則はありましたが、試合はクリーンでした。

チーム・エリアのコントロールは、フランスのヘッド・コーチが高倉氏のタバコ吸い友達ということもあり、問題はありませんでした。アメリカも問題ないと思っていたのですが、一番ひどかったそうです。

試合の翌々日には試合の映像を用いたレビューが行われ、指導がなされました。

そこで言われたのは、スロー・オフィシエティングです。ハッスルするのはよいけれど、急ぎすぎるのはよくない。歩くぐらいの感じで審判するくらいでよいのだと。

プリゲーム・ミーティングのやり方は、レフリーによっていろいろでした。

私は、ドイツのHenningとノルウエーのFrankのクルーに入りましたが、それぞれに、自分が重要だと思う項目をメモしてきて、一人ひとりに確認していくという方法を取っていました。

その1時間なり、1時間半のプリゲーム・ミーティングを共有すると、すーっとクルーになっていく感じがしました。レフリーは、常に笑顔で、クルーが納得するまで確認を続けるという印象でした。上手なミーティングの運営だと思います。

ヨーロッパの審判たちは、すでに国境を越えた試合を数多く経験しています。

ある試合では、「どこの国の審判がやってるんだ!!!」と罵声を浴びせられ、また、身の危険を感じながらフィールドを去るという経験をしています。そんな中でのルール理解とジャッジの実施、メカニクスの理解と実践、試合のコントロールです。そういう試練をかいくぐってきた強さがあるのかもしれませんが。

それと、ヨーロッパの審判たちは、会議でも打ち合わせでも、自分の考えを臆せずに発言します。素晴らしいことだと思います。国際化を体感した12日間でした。

アメリカでレフリーを経験させていただくという、しかもアメリカ戦を、夢にも見たことのない経験をさせていただきました。自分自身、決して満足のいく出来ではありませんでしたが、皆さんのお陰で大切な経験をさせていただきました。ありがとうございます。

この経験を私だけのものとしてはいけませんので、詳細な報告は、別途、ホームページに上げさせていただきます。しばらくお待ちください。

日本から派遣された、馬島さん、阿部仁さん、高倉さんは、それぞれ素晴らしい実績を残されて、「日本の審判ここにあり!」を示してくれました。阿部仁さんは、決勝戦のFJも担当しました。皆さんを誇りに思いますし、この4名を選んでくださった、オフィシャルズ・コミッティの伊藤さん、Tony、EinarそしてBillに感謝します。

重ねて、皆様のご支援と応援に感謝して筆を置かせていただきます。

感謝



CFO 報告

馬島 敦

2009年7月10～12日の3日間に渡る根岸・馬島両名のCFOクリニック派遣に対して御礼申し上げます。
アメリカの学生のトップリーグであるDIV.1:BIG10の方々を中心に、最新の動向と生の情報を得ることが出来ました。ここに感謝とともに報告をさせていただきます。

皆様の今シーズンの「STEP UP」の参考になれば幸いです。

日程

□ 7月10日(金) 18:30～21:30

- 12:00-18:30 Registration
- 18:30-19:00 Welcome
- 19:00-19:30 New Rule
- 19:30-20:25 General Mechanics
- 20:25-21:10 Penalty Enforcement
- 21:10-21:30 2009 Tom Quinn Award=Recipient: Bill LeMonnier
- 21:45-0:00 CFO Social Exchequer Restaurant & Pub

1. Grab & Restrict
2. Hook & Restrict
3. Take Down

ホールディングをコールした審判は試合後上記に係わる説明を求められ、それをVTRで確認され(メンターやコーディネーターにより)、評価を受けることになります。

パス・インターフェアランスに関しては2009年オフィシエティング・マニュアルのフィロソフィーとはほぼ同様です。

7月11日(土) 午前 8:30～12:20

- 8:30-9:00 Philosophy of Officiating
- 9:00-10:00 Guest Speakers
- 10:00-10:50 Guest Speakers
- 10:55-11:40 Kicking
- 11:45-12:20 Holding Philosophy
- 13:30-14:10 5-Man Mechanics
- 14:10-14:55 Passing
- 15:00-15:35 Goal Line Mechanics
- 15:45-16:30 Running
- 16:35-17:10 Pass Interference
- 17:20-18:05 TD/TB/Safety
- 18:10-18:45 Sideline Coordination
- 19:15-22:15 CFO Clinic Banquet Exchequer Restaurant & Pub

■リバース・メカニク；責任が入れ替わるシチュエーション

主な指導内容

- インターセプト、ファンブル・リターン等で確保の変更があった時、二つのポジションの役割を担当するようになる。
- プリ・ゲーム ミーティングで、コミュニケーションをとる。
- Short Wing と Deep Wing の役割りが入れ替わり、Deep Wing がプロGRESS、Short Wing がゴールラインに責任を持つ。
- R と BJ の役割りが入れ替える。
- U はやりすごしてバックサイドをみる。
- R は QB を注視していることがある。
- Short Wing は R を助ける。

□ 7月12日(日) 8:30～11:45

- 8:30-9:15 Rules Differences
- 9:15-10:30 Position Panel
- 10:45-11:30 Reverse Mechanics
- 11:30-11:45 Wrapup

スクリメージ・キックのリターンやファンブルとインターセプト・リターンの時にはショートウィングとディープウィング、レフリーとバックジャッジの役割が入れ替わってディープウィング＝フォワードプロGRESS、レフリー&ショートウィング＝ゴールラインを責任の面とするようにする。キック・リターンや攻守交替が起こった時には、全員が決してボールウォッチャーにならず、それぞれに与えられた仕事を転換し、その次の責任に向かって行動を速やかに移すようにする。

主な最新の動向と情報

■ホールディングとパス・インターフェアランスの反則に対する内容説明

特に2つの反則に関してコールした審判員はその具体的現象を説明で出来ることを求められます。要するに反則の質を問われるようになって来ています

例) ホールディング：二つを満たしていなければホールディングをコールしない

条件1＝アタッキング・ポイントである事

条件2＝影響があった事

(ダブルチームのブロックを除く)

更に分類として以下のものに当てはまる。



PAC-10クリニックに参加して

七久保裕哲

8月6日～9日の4日間、大野部長ともに、サンフランシスコで開催されたPAC-10クリニックに参加してきました。私は昨年も参加させていただきましたので、PAC-10のメンバーが私のことを覚えていてくれているか不安でしたが、その不安も余計な心配でしかなく、ソーガンさんをはじめメンバーのみんなから暖かく迎え入れていただきました。コーディネーターは昨年同様、のデブ・クタイアさんです。

PAC-10クリニックは、規則変更、メカニク、運営と、クリニックの基本的な構成は我々のクリニックとほぼ同様の内容となっています。しかし、NCAA Rule Book、CCA Mechanic Manualは発行されたあとの開催となっていますので、各メンバーはそれを読み込んで参加することが前提となっており、始めのセッションから高いレベルの内容となっています。また、ご存知のとおり、NCAAはインスタント・リプレー（以下、IR）を採用しているため、クリニックは、フィールド・オフィシャルとIRオフィシャルが対象となり、それぞれ個別のセッションと合同のセッションが組み込まれています。

初日の8月4日は、夕方のレフリーだけの会議から始まり、夜7時から全員でのオリエンテーションと規則変更の解説がありました。解説されたのはNCAA競技規則委員会の新しいセクレタリーであるロジャース・レディングさんでした。質疑では規則変更の詳細より、IRにおける対応（特にコーチとのやり取り）がほとんどで、PAC-10でもコーチとのやり取りに苦慮していることがわかります。

2日目（8月5日）は、朝7:30からテストです。A.R.のようなケースに対して、ボールが置かれるヤードライン、ダウン数&残りのヤード数、ゲーム・クロックの計時（スナップ/RFP）、プレー・クロックの計時（40/25）を回答するというものです。ヤード数などそれぞれの項目が1点で約20ケースを回答するテストです。平均点は90点台と、罰則の施行や計時についてしっかりと正確に理解していることが、ポジションに関係なく求められていることがわかります。

午後はスタンフォード大でのゴルフ（希望者のみ）とBBQ（とはいってもハンバーガー）でリフレッシュを楽しみました。昨年に続き、おつまみとして柿ピーを差し

入れし、好評でした。夜はホテルのホスピタリティールームで、夜遅く（といっても24時くらい）まで会話とアルコールを楽しみました。PCで見たライスボウルのラストプレーは、ソーガンさんやIRの方々の興味を引いていました。Rであった大野部長は、「これはお前か?」、「アナウンスで何と言ったんだ?」などと質問をくれましたが、「Good Judge!」、「Good Job!」とコメントをもらい、喜ばれていました。

3日目、4日目は、ビデオ討議（NCAAとPCA-10）、メカニクの討議を、ポジション別セッションと全体セッションで進め、その合間に運営に関する連絡やメンター（リタイヤした方でアドバイス、コーチをする人）からの「プライド・プロフェッショナリズム」という内容のスピーチが入ります。ビデオやメカニクのセッションの中では、反則をプレーヤーの具体的な動きで認識することを意識していました。「テイク・ダウンさせたからホールディング」とか、DPIでは「フック&ターンさせた」、「セパレーションのために押した」というような具体的な内容をRに報告すること、チームに報告すること、ゲームレポートの反則備考欄に記載するようにしています。このように反則を認識することは「こうやって掴んだ」というような認識の仕方よりはしっかりと反則を認識することができると思います。

PAC-10のクリニックを通して、全体を取り仕切ったクタイアさんのリーダーシップとファシリテートの凄さと、それをサポートしているIRコーディネーターのソーガンさんの偉大さを改めて感じた4日間でした。ソーガンさんとクタイアさんの来日が実現してほしいと願っております。また、NCAAのトップレベルのオフィシエーティングと最新情報を学べたことは非常に有意義で、今後もPAC-10との良い連携が継続できるように微力ながらも貢献し、日本の活動に生かして行きたいと思えます。

最後に、3日目夜に開かれた晩餐会では、クタイアさんが我々FOAのネクタイ（昨年、お渡ししました）を着用いただき、日本への暖かい心遣いを感じました。大野部長もスピーチを行い、「I Love Football!」と言ったところで、PAC-10のメンバーからの拍手喝采となったこととお伝えし、この報告の終わりとさせていただきます。



TASOクリニックに参加して

北 文彦

7月11日～12日にかけて、伊藤義樹さんとTASOクリニックに参加させていただきましたので報告させていただきます。本年はMcAllen というメキシコに近い場所で開催されました。

初日の11日は朝7時から2マイルのマラソン（Zebra Rope）があり、伊藤さん、関西から来ていた濱田さん、高倉さんと参加しました。参加人数は少なかったのですが、その後の全体のクリニックで日本から来た審判がZebra Ropeに参加したことを紹介され、全員から拍手をいただきました。

この出来事のおかげで気軽に話しかけられたのではないかと思います。

クリニックは、下記の内容でした。

7月11日

- Breakout Session

高校のヘッドコーチによるセッション、Running Game, Passing Game 等

- General Session

ルール改正、ゲストスピーカー（Larry Upson 氏：UFL）による講演

7月12日

- FCA Breakfast

- Breakout Session（ポジション別）

Referee のコースは NFL official のスーパーバイザー Gary Slaughter 氏が担当でした。彼は NFL のプレシーズン・ゲームで日本にも来たことがあるとのことでした。自分が大切だと感じたことは、Larry Upson 氏の講演で「KEYS」という言葉が大事であるということでした。それぞれは以下の頭文字です。

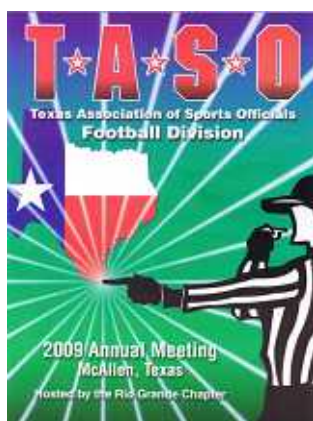
- K: Knowledge(知識) E: effort (努力) Y: yellow (Foul Marker) S: strive(これらを踏まえた更なる努力)

詳細はHPに掲載したいと思います。

上記の内容は関東審判部の審判活動の中でも生かしていきたいと思います。

以上のクリニックを通してルイスさん、ペギーさんには大変お世話になりました。

その他にも、関西の濱田さん、高倉さん、その他にも今回選出いただきました関東審判部理事会の皆様への感謝の言葉をもちまして今回の報告とさせていただきます。





75周年 記念章の由来について

Do your best, and it must be first class.

1 記念証をつける意義

日本で75年前にフットボールのリーグ戦が始まり、100年目に向けてこれからの25年間をファイナル・クォーターとして日本におけるアメリカンフットボールを益々盛んにしようという日本協会としての記念証です。秋のシーズン、日本のすべてのプレーヤー、審判員がこの記念証を貼って試合をします。

2 アメリカンフットボールの父

ポール・ラッシュは、キリスト教の布教だけでなく、スポーツの普及にも大きな役割を果たしました。戦前の立教大学野球部の米国遠征を成功させただけでなく、アメリカンフットボールを初めて日本に紹介したのもポール・ラッシュでした。後の昭和36年12月、日本アメリカンフットボール協会は「フットボールの父」という最高の称号をポール・ラッシュに送りました。

3 ポール・ラッシュの教え

1927年、聖徒アンデレ同胞会を設立したポール・ラッシュは、翌年、聖路加国際病院建設の募金を集めるために、院長のルドルフ・トイスラー博士の秘書として全米を回る募金活動に出発します。300万ドル近くを集めて聖路加国際病院は落成しますが、ポール・ラッシュにとって、この時の活動経験が、後に清里農村センターの建設資金集めに大いに役立つことになります。Do your best, and it must be first class. (最善を尽くせ、しかも一流であれ)これは、ポールがもっとも尊敬する聖路加国際病院設立者でもある、トイスラー博士から伝授された思想です。トイスラー博士はポールに「もしキリストの名のもとに何かしようと思ったら、人々が目標としてまねの

できる本物を示せ。しかもそれは一流のものでなければならぬ」と教えました。ポールはこの教えを忠実に守ったのです。希望を与え、日米の友好にも尽くしました。

4 アメリカンフットボール協会の発足

1934年(昭和9)立教大学教授ポール・ラッシュ、同大学体育主事ジョージ・マーシャル、同大学教授小川徳治、明治大学教授松本滝蔵らの尽力で、この競技に興味をもつ早稲田、明治、立教の学生(アメリカ日系二世が主力)がチームを編成したことに始まります。同年11月29日アメリカの感謝祭当日、明治神宮外苑競技場(現国立競技場)において、前記3大学選抜選手と横浜外国人クラブとの間で日本における最初の試合が行われ、翌月前記3大学を中心に東京学生米式蹴球連盟が設立され、初代理事長にポール・ラッシュが就任し、第1回リーグ戦が行われました。優勝したのは明治大学でした。

5 私たちにできること

私たちのできる、彼への精一杯の恩返しは、ポール・ラッシュの目指したもの、大きな愛に満ちた彼の思想を受け継ぎ、広め、後世に伝えることです。私たちフットボール関係者は微力ながら、ポール・ラッシュの思想を受け継ぎ、日本のアメリカンフットボールの発展に寄与していこう気持ちをこめて、この言葉を記念章のなかに縫い込みました。



関東学生アメリカンフットボール連盟の記念章